

## 学級の枠を越えない習熟の程度に応じた学習指導の一実践

- 難易度別ワークシートと様々な学習形態とを組み合わせた授業を通して -

竺 沙 敏 彦

京都府城陽市立南城陽中学校

### 1. はじめに

平成 13 年度から 5 か年計画で第 7 次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画がスタートしている。筆者の周囲でも少人数加配教員が増えつつあり、少人数指導によって数学の授業を行う学校が増加している。今後も少人数指導や習熟度別学習などを行う学校が増加していくことが予想される。

国立教育政策研究所(2001)は、数学の授業を行う際の適正な生徒数を中学校教員にアンケートを行った。それによると、生徒数が「31人～40人」では、「多すぎる」の回答率が「適正」のそれを上回っている。それに対し、「30人以下」では、「適正」が「多すぎる」を上回っている。特に、「21人～25人」では、「適正」が81.8%となっている(p.17)。教師が「適正」であると考えた根拠の一つは、その人数であればより効果的な指導が行え、生徒の学力向上につながるということであろう。

しかし、学級規模が小さくなることで生徒の学力向上につながるのでしょうか。国立教育政策研究所(2001)は、学級規模別に数学の問題の正答率を調査している。その結果をもとに、「学級人数(学級規模)による学習後の内容の得点が影響されるという立場は、今回の調査からは指示されなかったと言える。(p.70)」と考察している。また、このような結果となったことの一つの要因として、「指導法に差があまりない場合には、学級規模による成績の差が生じないのかもしれない。(p.70)」とも述べている。

本稿では、学級規模を小さくしなくても、指導方法の工夫によって生徒の学力向上を図ることができる可能性について、実践の結果をもとに述べる。

### 2. 学級の枠を越えない習熟の程度に応じた学習指導の一実践

筆者は、1993年からチーム・ティーチング(以下、T.T.と略記)を実践している。T.T.の導入によって、40人の生徒を2人の教師で指導できることになった。その際に議論になったことの一つに次の2つのどちらがより良い形態であるかであった。

40人のクラスを2つに分けて、それぞれ20人を1人の教師が指導する。

40人のクラスを2人で協力して指導する。

本稿では、後者による実践の概要とその結果について述べる。

#### (1) 実践の概要

本実践の特徴は次の2点である。

難易度別ワークシート(3段階以上の難易度)を利用した個人学習であること  
学習形態を「先生と一緒に学習する」、「グループで学習する」、「一人で学習する」の中から選択できるということ  
また、この2つをそれぞれ個人選択できるようにしたことにより、学習内容と学習形態を自分の学習状況に応じて選択できるようにしたことが大きな特徴である。

### 3. 調査の概要と結果

#### (1) 調査の概要

1997年6月に京都府公立中学校1年生35名に実施した。「正負の数の四則計算」の単元終了後、まず診断テスト(20問)を実施した。上記の方法で2時間学習を行った後、診断テストと類似した問題で構成された確認テストを行った。

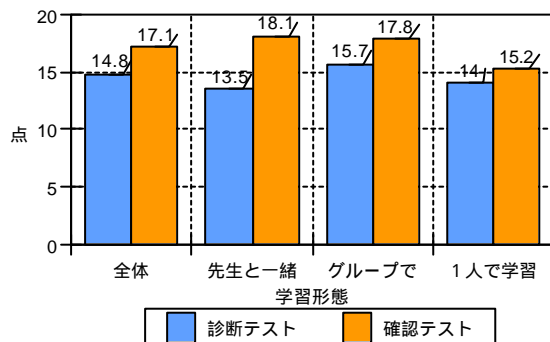
#### (2) 調査の結果と考察

各学習形態を選択した生徒数は表1の通りである。

(表1) 各学習形態の生徒数

学習形態	先生と一緒に学習	グループで学習	1人で学習
人数	8人	18人	9人

診断テストと確認テストの結果は図1の通りである。



(図1) 学習形態別のテスト結果

どの学習形態でも、確認テストにおいて診断テストより点数は上がっている。特に、「先生と一緒に学習する」コースにおける点数の伸びが他の2つよりも顕著である。

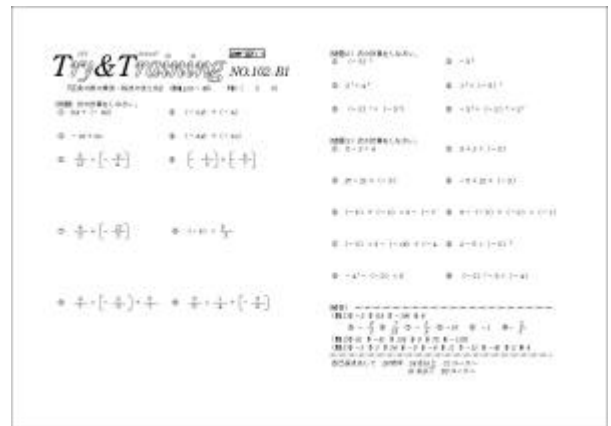
このような学習形態においては、2人の教師で指導することが有効である。

#### 4. 難易度別ワークシートの開発のための試み

筆者は、全学年の全ての単元末において上記の実践を行っている。その際に必要な難易度別ワークシートの開発は膨大な作業となる。そこで、全てのワークシートに「Try & Teaching」とタイトルをつけ、近隣の学校の先生方と協力してワークシートを作

成を行ってきている。また、お互いにそのワークシートを授業で使用し、常に改善を行いよりよいものを作る実践を続けている。ただし、今回の学習指導要領の改訂により若干の作り直しが必要となっている。

また、これらのワークシートを多くの先生方に使用していただき、またより発展させるために、Web上に試験的にワークシートの公開を行っている。 <http://tt-club.hoops.ne.jp/>



#### 7. おわりに

国立教育政策研究所(2001)も指摘しているように、単純に学級規模を小さくすることが生徒の学力向上に直結する訳ではない。学級の規模に応じた適切な指導方法を工夫することによって、少人数指導や習熟度別学習を真に活かすことができると考える。さまざまな学習場面でどのような指導形態が望ましいか研究を深める必要がある。

#### 資料：事前テストの問題

$$\begin{aligned}
 & (+8) \times (-6) - 3 \times 12 - 4 \times (-9) + 5 \times (-8) \times (+4) \\
 & 6 \times (-11) \times (-2) - (-4) \times (-3) \times (-5) - (-5) \times (-13) \times (-2) \times 10 \\
 & (-7) \times (-5) \times (-3) \times (-2) - 3^4 - 2^4 - 3^2 \times 2^3 \\
 & -5^2 \times (-4)^2 - 3^2 \times (-2)^4 \times 2^3 - 7 - 3 \times 4 \\
 & 3 \times (-2) - (-4) \times 5 - 5 + (-4) \times 5 - 2 - 9 - (-3)^2 \\
 & 8 - 3 \times 4^2 - 5 + 3 \times \{(-3)^3 - 3\} - (-3)^2 \cdot 5 \times 4^3
 \end{aligned}$$

#### 【参考文献】

- (1) 国立教育政策研究所(2001), 「国立教育政策研究所紀要第131集<学級規模に関する調査研究>」